

攪乱地のきのこ

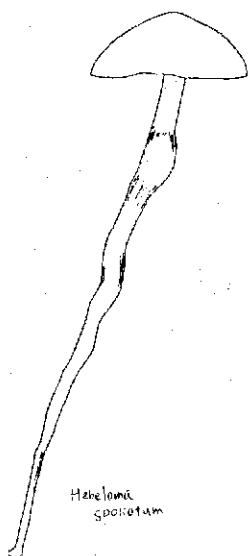
滋賀大学名誉教授
本郷 次雄

辞書によれば、攪乱は「コウラン」の慣用語で、かき乱すことをいう。故に攪乱地とはかき乱された土地のことである。土地がかき乱される原因となるものを考えてみると、大きく分けて物理的、化学的、生物的なものが挙げられるであろう。まず、物理的なものとして、暴風、豪雨、地震、雪崩（なだれ）、氷河、火山噴火、山津波、山火事などの天然現象のほか、ダムや道路の建設、宅地造成、河川改修、田畠の耕作、その他多くの人為的な行為が考えられる。化学的な原因となるものとしては、酸性雨、化学肥料や薬剤の散布、鉱山の鉱毒、硫気孔、車の排ガス、工事からの排煙や廃水などが挙げられるだろう。生物的な原因としては、たとえば獸や鳥や昆虫などの異常繁殖によるなんらかの影響が考えられるであろう。また異常繁殖でなくとも、ノネズミやモグラの行動によって河川や溜め池の堤防が崩壊することもありうる。

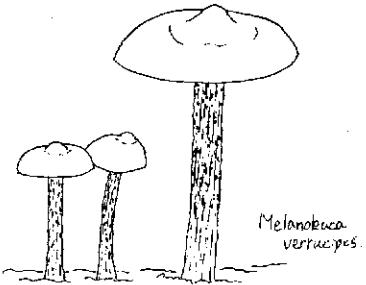
新しく物理的な攪乱地が生じた場合、オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ・アメリカセンダングサなどの帰化植物がそこにいち早く侵入することは一般によく知られている。しかし、年数がたつにつれてセイタカアワダチソウやヨモギなどの多年生植物が優勢となり、さらに何年かたつとススキの優先する群落となる。さてきのこ類に関しては、攪乱地における高等植物のようなサクセッション（遷移）までは、一部を除きあまりくわしくは調査されていないが、攪乱地に発生する種類は現在かなり多く知られている。

いわゆるアンモニア菌に関しては、相良直彦博士（京都大学）の一連の研究が著名で、きわめて興味深い。尿素、アンモニア水、尿酸など、土壤にアルカリ性をもたらす窒素化合物を林地に投与した場合に（化学的攪乱を行った場合）そこに発生する菌群があり、これらはまた動物死体分解跡、糞尿分解跡などからも発生する。イバリシメジ、ザラミノヒトヨタケ、ザラエノヒトヨタケ、アシナガヌメリ、ナガエノスギタケダマシ、アカヒダワカフタケ、オオキツネタケなどがそのような例で、アンモニア菌と呼ばれている。

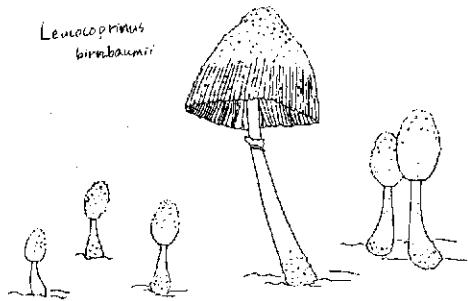
また、焚き火跡や山火事跡にはヤケノシメジ、ヤケノヒメイタチタケ、ヤケノヒトヨタケ、ヤケアトツムタケ、ツチクラゲなどの一群のきのこ類が発生する。これらは火によって攪乱された土地に現れるきのこで、ヨーロッパでは古くから知られており、焼け跡菌という。以上のほか、筆者が攪乱地に発生すると考えているきのこを次に幾つか拾ってみることにする。



ニオウシメジ、ツブエノシメジ、オオシロカラカサタケなどは堆肥その他の有機物が埋め込まれた地上（耕作地や庭園）に大量発生することがある。ことにニオウシメジは重量数十キロから100キロもの大塊を生じことがある。しかし、地下の栄養分が消費し尽くされると2,3年で姿を消し、新たな栄養分のある他の地を求めて移動して行くようである。



コガネタケやヒイロチャワントケは林道わきや林内の空き地などでよく見かけるが、しばしば大群生することがある。コガネキヌカラカサタケは庭園や鉢土上、または宅地造成地や道路わきに発生するレモン色の可憐なきのこで、新しく山土などが運び込まれたような場所を好みようである。近縁種キツネノハナガサも同様の性質のきのこと思われる。しかしこれらも永くは定住せず、せいぜい2,3年で姿を消してしまう。



アシクトコガサタケは、コガサタケ属の中では例外的な中～大形肉質のきのこで、從来ヨーロッパと北アメリカではまれに知られていた。それが今から20余年前（1974），偶然にも筆者の自宅の（滋賀県大津市）菜園で見つかった。どこからどういう経路で我が家まで到達したのかは全くわからない。ただ一度発生したきりであったが、それから10余年後に（1988）長野県真田町でビニールハウス内に大量発生し、採集品が筆者のもとに送られてきて再対面することができた。菜園にしてもビニールハウスにしても土壤がつねに耕され攪乱され、また肥料が施されている。本菌はそのような攪乱地を求めるきのこのようで、コガサタケ、ハタケキノコ、タマムクエタケなども同じような性質のものであろう。

世界的稀菌といわれる腹菌オニノケヤリタケは1986年の秋、長野県小諸市の材木置場で日本で最初に採集され、その後2,3年間は発生したが、現在では発生は見られないとのことである。そこでは樹皮や材片の混じった地上に多数が群生していたという。本菌は1868年以来、ヨーロッパと北アメリカでほんの数回発見されただけといわれているが、たいていは鞣し革用の樹皮を投棄した場所であった。いずれの場合でもタンニンを多く含む地上であったことが考えられる。したがってタンニンを求めて点々と移動しているのであろうが、国から国へ、大陸から大陸へと比較的短期間のうちに大きく移動するのはどういう機構によるのであろうか。

さて上述のような攪乱地のきのこと思われるものを一覧すると、たいては腐生菌で、帰化植物ないしは帰化菌類の行動と類似している。むしろ帰化菌類の大半のものと同じである、と言ってもよいであろう。以上に挙げた種類のほか、ハラタケ類では恐らくハラタケ科、ヒトヨタケ科、オキナタケ科、モエギタケ科などの攪乱地のきのこが多数みられることであることが予想されるのである。